

「生きている者の神」

(ルカによる福音書 20:27-38)

サドカイ派の人々が、復活について主イエスに問います。彼らは「モーセ五書」(旧約聖書の創世記～申命記、「律法」とも言われる箇所)に定められている「レビレート婚」をたとえに用い、復活が聖書に基づかない、あり得ないものだと断定しようと試みます。レビレート婚とは、子どものないやもめが、夫の兄弟、つまり義兄弟と行う義務的な結婚のことです。この法に照らし、この世で七人もの夫をもった妻は、天の国では誰の妻になるのか、さらには聖書で禁じられている重婚を犯すことになるのではないかと、彼らは問い詰め、天の国の存在、復活の命を否定しようとしています。

これに対し、主イエスは彼らの主張の誤解を指摘します。まずは 34-36 節です。「この世の子ら」には死があるため、子孫を通して自分が生き残るため、結婚をして子孫を残す必要があるが、「死者からの復活にふさわしい」者は「神の子」とされ、もはや死ぬことがないから「めとることも嫁ぐこと」も不要だ、と言うのです。サドカイ派の人々はこの世の婚姻関係がそのまま死後も続くと考え、重婚の心配をしましたが、主イエスによれば、「次の世」では「めとることも嫁ぐことも」ないので、重婚の心配もなくなります。

この死後の命、復活の命の根拠を、主イエスはサドカイ派と同じ「モーセ五書」に置きます。主イエスが引用したのは、神が燃える柴の中から「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」であるとモーセに語りかける箇所(出エジプト記三章)でした。当然、モーセの時代には三人ともこの世にはいないにもかかわらず、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と言われる神にとって、それらの命は失われたものではなく、今も神は「アブラハムの神」であり続け、それらの命は神と共に生きている、と言う訳です。

こうして主イエスは、ご自分の死と復活によって確証される、復活という究極の希望をサドカイ派とのやり取りのなかで示されました。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神」です。

「生きている」とは、この世にいる間のことだけを指すものではありません。主イエスを復活させた神を信じる者には、死後、神と共にある命、「神の子」として生き続ける命が用意されています。もはや死も絶望も勝てない、神と共にある命をわたしたちに与えるため、主イエスはこの世に来てくださいました。